発達理論の学び舎

Back Number: Vol 51

Website:「発達理論の学び舎」

© YOHEI KATO 2018

目次

1001. 差異と差異、そして究極的な意味

1002. 問いが問いを生み、問いが問いを解決することについて

1003. 哲学の力と概念の力

1004.「金槌」と「釘」の関係を彷彿させる日本を取り巻く発達理論の現状

1005. 円周率の不思議と円の中の縁

1006. 音楽を暗示する奇妙な夢と作曲について

1007. 認識と行動を変える哲学

1008. 逆周りから得られた気づき

1009. さらなる下積み期間を求めて

1010.「実践書」について

1011. 小さな作品をじっくりと数多く

1012. 成人発達とキャリアディベロップメント、そして夢のシンボル

1013. 階層的かつネットワーク的な生命としての知識体系

1014. 拡散的な思考と留まることについて

1015. 諦めと円転運動

1016. 夢の中での投影について

1017. 新たな朝の習慣

1018. 哲学・数学・心理学・音楽

1019. ハーバード大学書店からの贈り物

1020. 発達理論と音楽で繋がる縁

© YOHEI KATO 2018

1001. 差異と差異、そして究極的な意味

気づかないうちに、いつの間にやら書き留めていた日記の数が1000を超えた。その数字そのものに意味はないのだが、それらが積み重ねてきた小さな差異の連続には、思わず立ち止まって考え込んでしまうような大切な何かがある。

米国の文化人類学者グレゴリー・ベイトソンが残した名言にあるように、差異が差異を生み、差異は私たちに大きな違いをもたらすのだ。日々の生活の中で、毎日絶えず小さな差異がそこに存在していることに気づかせてくれたのは、日記の存在であった。また、そうした差異に気づきを与えれば与えるほど、新たな差異が自分の目の前に開かれていくような感覚があった。そして、そうした感覚の積み重ねが、自分自身の中で差異を生み出し続けることにつながっていたのだと知る。それを絶えず支え、内と外の差異を媒介してくれていたのが日記だった。

発達心理学者のハインツ・ワーナーが指摘するように、発達とは差異化と統合化のプロセスなのだ。差異化がなければ、統合化は起こらない。それは、生物の進化の過程を見れば明らかであり、細胞分裂によって臓器の形成があり、生物全体が形成されていく。それと同様のことが、私たちの内側にも起こっている。内側の成熟には、差異化というものが不可欠なのだ。

1000ほどの日記を書く中で、様々な差異化が自分の中に起こっていたことに気づく。日記全体を通してそのように思うし、何より、1000の日記の一つ一つが差異に満ち溢れたものであることに驚きを隠せない。これは以前の日記で取り上げていたように、私たちは全く同一の日記を書くことができないのだ。これは驚くべきことではないだろうか。

そして、これは私たちが常に変化していることを強く示す現象だと思うのだ。日記を通じて、差異に気づき、差異を捕まえることによって、新たな差異が生まれていく。その様子を見ていると、私たちは絶えず差異の中で生きることを宿命づけられているように思える。私にとって、この宿命と真摯に向き合う一つの手段が日記を書くということなのだろう。

昨日、行きつけの古書店に向かうため、自宅のドアを開けた。ドアに鍵をかけ、螺旋階段を下りながら、絶えず表現することの究極的な意味とその行為を通じて生きることの究極的な意味に触れた。三階から一階に降りる間中、私は、自分の内側のものを外側に表現することと、人間として他者と共

に生きることの究極的な意味に触れていた。この究極的な意味があるから、私は毎日生きることができ、何かを絶えず創出していこうという意思が生まれるのだとわかった。

意味が持つ力は果てしなく大きい。内面宇宙が外面宇宙を飲み込みんでしまうことからも、人間の意味が持つ力は無限を飲み込む無限性を持ったものなのだと思う。

究極的な意味に触れた感覚が、言葉を超えた形で今この瞬間も自分の内側に流れているのを感じる。これから午前中の仕事に取り掛かりたい。2017/4/28

1002. 問いが問いを生み、問いが問いを解決することについて

今日の午前中は、計画とは随分と異なる形で進んだ。午前中にジル・ドゥルーズの“Difference and Repetition (1968)”を一章読んだ後、カントの“Critique of Judgment (1790)”の中で、今の自分の関心に最も合致する箇所を中心に再読しようと思っていた。結局、ドゥルーズの書籍を一章読み進めるだけで午前中が終わった。ようやく300ページに及ぶ全体のうち、3分の1を読了したことになる。午前中に読み進めていた章は、何度も立ち止まって考えさせることを私に要求してきた。

私は、日々の生活を一つの大きな習慣の中で形作るようにしている。これは意識的なものであり、時に無意識的なものにもなる。日々の仕事を習慣的なものとして取り組み続けることによって、ドゥルーズが指摘するように、習慣は反復から差異を引き出すということを強く実感するようになった。習慣は反復的なものなのだが、絶えずそれは差異を生み出す。そこに差異があるからこそ、私は再び反復的な習慣に向かえるのだと思う。そのように考えると、習慣という反復的な行為が持つ面白い特徴に気がつく。

習慣とは、差異の中に差異を生み出すための仲介者のようだ。そして、習慣が差異を生み出す反復であるという現象はとても面白い。さらに注目に値するのは、反復が変容的な作用を持つということである。これは精神の発達や治癒をもたらし得るという意味での変容作用である。

ドゥルーズの書籍の中で、過去のトラウマは、反復できない原体験に囚われているから起こるのであって、それを乗り越えていくためには十分な反復が必要なのだ、という主張があった。過去のトラウマ体験に立ち返り、その強度を変えながらあえてそれを再体験させることによって精神的治癒を

図るという方法は、サイコセラピストであれば理論的にはそれを知っているだろう。しかし、十分な反復をクライアントに体験させるためには、様々な準備と緻密な方法が必要となる。

私自身、そもそもなぜ過去のトラウマを再体験することを通じて治癒が生じ得るのか、ということが不思議であった。だが、再体験という現象の本質に反復性とそれがもたらす差異があるということがわかった時、非常に腑に落ちるものがあった。そして、反復がもたらす変容作用は精神的な治癒のみならず、精神的な発達にも等しく当てはまることにも気づかされた。

私たちの精神は、過去の発達課題を乗り越える形でそのプロセスが進行していく。その際に、発達課題という自分自身に対する問いと向き合い、それに答えて行くことが必要になる。しかし、答えを探そうとしていては、問いに対して答えを与えることはできない。

重要なのは、問いが問いに答えるという循環を生み出すことである。つまり、既存の問いに対して答えようとするのではなく、問い返そうとすることが重要なのだ。そこから、問いが問いに答えていくというのは、反復が差異を生み出すからなのではないか、という考えに至った。問いが問いに対して問い返そうとするのは反復作用なのだが、それによって過去の問いが解決できていたというのは、問い返した新たな問いの中に、以前の問いに答えるための差異が内包されているからなのではないだろうか。

そうした差異が、これまで抱えていた問いを解決してくれるのだ。そして、既存の問いが解決されたのと同時に、新たな問いが生まれるという反復が再び始まる。そうした循環が再び始まるというよりも、それは止まることなく絶えず運動を継続させていると言えるかもしれない。問いが問いを生み、問いが問いを解決していくというのは、これ以上にないほど興味深い現象だ。2017/4/28

1003. 哲学の力と概念の力

なぜだか私は、ベートーヴェンのピアノソナタ第17番の第3楽章が始まるといつも仕事の手を止める。意識を向けようとせず意識がそこに向かうのだ。『テンペスト』と呼ばれるこの曲、特に第3楽章は、必ずその存在を私に訴えかけてくる。そこに意識が向かう時、それが第17番の第3楽章であることを知るのみならず、そこに意識を向けた自分の存在に改めて気付くという現象が伴う。これもまた面白い現象だ。

フランスの哲学者ジル・ドゥルーズの書籍をここ最近毎日一章ずつ読み進めている。私は哲学者でもなんでもないため、この哲学者がフランス現代思想の代表的な人物であることを最近知った。

私がドゥルーズの書籍を購入しようと思ったのは、フランス現代思想を研究するためでもなんでもなく、人間の発達をより深く理解するためだった。発達心理学者のハインツ・ワーナーの発達思想に刺激を受け、発達現象が不可避に内包する「差異化」と「統合化」について思想的な探究を深めようとしていたところ、ドゥルーズの書籍と出会うことになった。

そうしたことから、正直なところ、ドゥルーズという人物が何者であり、フランス現代思想がどういったものなのかについては、あまり関心を持たなかった。しかし、連日ドゥルーズの書籍を読んでいると、この哲学者の思想が持つ独自性に関心を引かれるようになった。何より、ドゥルーズが用いる概念の色や形が独特なのだ。「フランス的」と安易に表現してはならないと思うが、確かに彼の思想はフランス的な独自性を持っており、なおかつそれはパリという場所でしか育まれないようなものだと感じていた。

昨年の夏にパリを訪れた時、この街には何かがあるに違いないと思っていたが、その一つは、ドゥルーズが持っているような多元色かつ多様形の思考を可能にする土壌のようなものだ。これは、ドビュッシーのような作曲家の音楽に相通じることかもしれない。ドゥルーズが持つそのような思考特性に関心を持ち、彼の書籍をいくつか購入してみることにした。哲学者としての彼の仕事を見ていると、哲学がこれほどまでに実践的なものになりうることに目を見開かされた。

あるいは、哲学とは本質的に実践的なものの極みであることを教えてくれた、と言ってもいいだろう。購入するべき書籍を吟味していたところ、特に中期の仕事以降、彼の哲学が常に社会と密接に関わったものに変容し始めていることに気づいた。“Anti-Oedipus: Capitalism and Schizophrenia”や“A Thousand Plateaus: Capitalism and Schizophrenia”はその代表的な作品だと思う。哲学がこれほどまでに実践的なものであるという気づきは、それが自分の現在進行形の体験に基づくものでもある。

哲学は、私たちの認識の方法を根底から変容させる力があるがゆえに、実践的であり、なおかつ、常に日々の生活に根ざしたものだと思う。内面と外面が絶えず相互作用しているため、内面の認識

が変容するというのは、行動の変容をもたらす。行動の変容をもたらす力を持った哲学が、単なる抽象的な学問に過ぎないと見なされる傾向にあるのは残念でならない。私にとって、哲学は恐ろしいほどに認識の方法とあり方を変え、行動を変える力を持っている。

ドゥルーズによって明確に気づかされた哲学の力は、実は私の第二弾の書籍の重要なテーマの一つであることに気づかされた。第二弾の書籍は、哲学について扱っているわけではない。しかし、ドゥルーズが述べるように、哲学とは概念を創造する営みである点を考慮すると、哲学の力は概念の力と密接に関係しており、私は概念が持つ力について、第二弾の書籍の中で暗示的に主張したかったのだと気づかされた。

新たな概念は、認識を新たにし、行動を新たにする力を持っている。思想家は実務家でなければならないし、実務家は思想家でなければならない。思想は実務的であり、実務は思想的でなければならない。それらの思いは、概念の持つ力、ひいては哲学の持つ力と密接に関係したものだったのだ。2017/4/28

1004.「金槌」と「釘」の関係を彷彿させる日本を取り巻く発達理論の現状

今日は、昼食後の仮眠を終えてから、修士論文の修正に取り掛かった。昨日の続きから作業を始め、計画通りの修正を施すことができた。“Discussion”のセクションに関して、昨日は少し観点の抽出と論理の運び方に苦労していたが、今日はそれらの点が支障となることはなかった。時間にして二時間ほどであったが、その間に文章を執筆することに集中することができていたように思う。

この感覚を毎日活性化させることが重要であり、英文を書くことに関しても、日本語の文章を書くのと同様に、毎日無理のない分量を継続的に書いていくことが最適な修練になるだろう。今回の修士論文を執筆して一息入れるのではなく、継続的に学術論文を執筆し続けていくことが大切になる。それが毎日一ページであっても良いのだ。何よりも、絶えず論文を執筆していくという営みが大切となる。

こうした積み重ねが、気づかないうちに、いつか大きな建築物になるのだ。修士論文終了後に取り掛かりたいテーマは明確なものがいくつかあるので、六月の半ばからそれらに着手し始めたい。

論文の手直しがひと段落ついたところで、刊行を待つ第二弾の書籍について思いを巡らせていた。この書籍に込めた想いは多岐にわたり、そのうちのいくつかはこれまでの日記に書き留めていた通りである。

それらと重なる部分もあるだろうが、既存の発達理論やこれまでの能力開発の理論やトレーニング方法にない見立てと道具を提供したい、という想いは重要なものの一つであった。発達理論や能力開発を取り巻く日本の現状を見ていると、やはり人間の発達に関する概念や理論が圧倒的に欠けているように思える。そうした状況を乗り越えていくために、重要かつほとんど知られていない概念や理論を提供し、それらの活用方法を示唆することが重要なテーマであった。

心理学者のアブラハム・マズローの名言の一つに、「もし使える道具が金槌しかなかったら、全ての問題を釘の問題に還元してしまうだろう」というものがある。まさに、人間の発達を支援することに関して、現在日本で普及しているような発達理論しか使える思考の道具がないのであれば、全ての問題をその発達理論の問題に還元してしまうことになりかねない。実際に、こうした問題はすでに顕在化し始めている。

具体的には、人間の発達を考える手段として、ロバート・キーガン、ビル・トーバート、ケン・ウィルバーたちの発達理論しか知らないがゆえに、発達現象に関する課題や問題をそれらの理論に即座に還元してしまう傾向が見え隠れし始めている。そうした問題が蔓延することを危惧し、顕在化し始めた問題の解決に向けて、現在普及している発達理論とは発想が異なる理論を紹介していく必要があると思った。第二弾の書籍の中で取り上げているカート・フィッシャーのダイナミックスキル理論はまさにその代表である。

また、本書の中で、私が既存の能力開発の発想や方法に否定的な見解を加えているのも、対極的な観点や発想を投げかけることによって、日本の能力開発を取り巻く思想や実践が健全な発達に向けて歩めるようにするためであった。対極のもの・異質のものを取り入れることは、個人の発達のみならず、能力開発のような社会的な実践領域の発達においても重要だ。個人と集合の発達において重要なのは、絶えず対極なもの・異質なものを取り入れていくことであり、これは前作の主張と同じである。

© YOHEI KATO 2018

前作の主張を受け継ぎ、前作の内容に対して対極的な発想を投げかけるような試みをしたのが第二弾の作品だったのだと思う。個人も組織や社会も、そして、著作も、「含んで超える」ということをしていかなければ、発達が起こりえないというのは等しく同じだ。2017/4/28

1005. 円周率の不思議と円の中の縁

早朝、一杯の水を飲み、いつものように身体を動かすことから一日を始めた。ここ最近は、モーツァルトの交響曲を聴きながら身体を動かしている。その際に、書斎の外を眺めるのではなく、壁にかかったニッサン・インゲル先生の二つの絵画作品を眺めながら身体を動かすことが毎朝の儀式的な実践となっている。インゲル先生が、私の主題と構想をもとに制作してくださった作品を年始に日本からオランダに持ち帰り、今では一日の中で、早朝のみならず折を見てこの作品を眺めている。

その作品は、地球を陰陽の円と見立て、陽の部分にバッハの音楽世界を、陰の部分にベートーヴェンの音楽世界を、地球の外側の宇宙にモーツァルトの音楽世界を表現してもらったものだ。今朝、この作品を眺めていると、これまで見えてこなかった意味に気付いた。より正確には、この絵画に対して新たな意味を付け加えることができた、と言った方がいいだろう。地球を表現した円を眺めていた時、円周率が持つ不思議さに捕まった。

この世界のありとあらゆる事柄を数字にした際に、それらの全てが、円周率を構成する無限の数字の中に織り込まれていることに対して神妙な気持ちになった。昨日書き留めた日記や今日の日記、そして明日の日記を数字に変換した際に、それらの数列が必ず円周率の中に含まれていることが不思議でならなかった。自分の過去・現在・未来が、一つの円の中にある、いや一つの円の円周であることが、途轍もないことを意味しているように思えたのだ。

以前の日記の中で、私と地球を等しく重要な点としてみなすことについて書き留めていたように思う。私たちの存在は、点でありながら円でもあるのだ。そして、人生において私たちの一つ一つの行動や生み出す意味は、絶えずその円の円周上にあるのだ。インゲル先生の絵画を眺めながら、そのようなことを考えていた。それはハッとさせられる気づきであった。

円というシンボルが、私にとってこれまで以上に大切なものとなった。円の中に縁があり、その縁が円周としての日々の意味や活動を絶えず生み出しているように思えて仕方なかった。2017/4/29

1006. 音楽を暗示する奇妙な夢と作曲について

昨夜も奇妙な夢を見た。この夢も先日の夢に引き続き、音楽に関するテーマが潜んでいるような夢だった。

夢の中で私は、小学校か中学校の体育館の中にいた。いたって普通の体育館である。この体育館には四隅のそれぞれにドアがあり、それらのドアは閉まっていた。しかし、内側から鍵をかけている様子もなく、外側から誰でも入れるようになっていた。

体育館の中には、私以外にも友人が何名かいた。私たちは、体育館の中で運動をすることもなく、一つのプロジェクトに向けて話し込んでいるようだった。なにやら、その日の夜七時ちょうどに、小さな怪物が体育館に押し寄せてくるとのことであり、それらを全て撃退する必要があるとのことであった。このプロジェクトに向けて、私たちは戦略を練っていた。

体育館の四隅には、二階に上がるためのはしごが設置されていた。二階と言っても、それはフロアではなく、狭い通路がそこにあるだけだ。四隅に設けられたはしごのどこか一つに自動小銃のようなものを設置できることになっていた。私たちは、その武器をどこのはしごに設置するのが最適かを話し合っていた。

七時ちょうどに襲来する小さな怪物たちが体育館のどこのドアからやってくるのかは、すでに明らかになっていた。また、それらの怪物の行動特性もなんとなく把握していたため、結局、怪物たちがやってくるドアと対角線上にあるはしごに自動小銃を取り付けることにした。

怪物たちの行動特性を考慮すると、対角線上にあるはしごに向かって来るということが予測されたが、中には例外的に別のはしごに向かうものもいることが予想された。そうした例外にどのように対処するかについて少しばかり話し込んでいた。それらの例外に対しては、手持ちの拳銃で対応するしかないという結論に落ち着いた。私たちは、夜の七時に向けて二階の通路に待機することにした。

人員の配置についても議論していた通りであり、怪物の襲来に備えての休憩のローテンションもすでに組んでいた。友人の一人が通路で仮眠をしており、別の友人が突然、自動小銃の設置の位置

を変える必要があると主張し始めた。彼の論拠は、ネットワーク理論の中にある一つの原理であった。しかし私はすかさず、その原理は100体を超す個体運動に適用できるが、今回は怪物が60体しかやって来ないため、その原理は適用できないと反論した。

また、怪物の襲来時刻が迫っていたこともあり、今更自動小銃の位置を変えることは得策ではないと主張した。結局、元の位置に自動小銃が置かれることになり、私たちは怪物が訪れるのを静かに待っていた。

律儀にも七時ちょうどに60体の怪物が体育館内に侵入してきた。それらの怪物は予想通り、50cmほどの小さな大きさであった。一つのドアから一体一体の怪物が体育館内に侵入する様子を、私は二階の通路から眺めていた。

怪物たちの行動は奇をてらったものではなく、私の予想の範囲内であった。事前に予想していた通り、ほとんどの怪物が、侵入してきたドアと対角線上にあるはしごに向かって進んでいった。そして、はしごの一番下、下から二番目、三番目を飛ばして四番目に取り付けられた三つの自動小銃によって、怪物たちは次々と撃退されていった。ごく稀に、三つの自動小銃を飛び越えて、さらにはしごを登ってくるような怪物もいたが、それらも全て手持ちの拳銃で撃退することができた。

次々に撃退されていく怪物を観察している時、撃退される瞬間に怪物たちが小さな音を奏でることに気づいた。それも、一体一体が異なる音を発しながら撃退されていくことに気づいたのだ。その時、私はそれらの音をもとに一つの音楽を作ることができると確信していた。あるいは、怪物たちが撃退されていくプロセスそのものが一つのメロディーであり、一体一体が撃退されていく際に発する固有の音が、すでに一つの音楽になっているような気さえしていたのである。

そうした気づきを得て、夢から覚めた。夢が暗示していたことに思いを馳せながら、昨日の夜の出来事について振り返っていた。

昨日は、夕方の仕事に目処が立ったため、一時間半ほど作曲についての学習と実践を行っていた。実践と言っても、どの作曲ソフトが一番使いやすいのかを実際に手を動かしながらあれこれ試している程度だった。そうした試行錯誤を経て、自分に使いやすいソフトを一つ発見することができたので、今後はそれを活用していこうと思う。

© YOHEI KATO 2018

昨夜の気づきは幾つかある。一つには、最初は一分から三分ぐらいの短い曲を多く作ることを意識し、一つ一つの曲の構成を大切にしていこう、という気づきである。作曲について学習を進めていると、自然言語を用いて文章を作るのと同じような文法があり、文章全体に起承転結などの構成があるように、曲にもそうした構成があることに改めて気付かされた。

最初のうちは、そうした構成に忠実になることが重要であり、型が完全に身についてからそうした構成を少しずつ逸脱するような曲を作っていくという方針を固めた。また、一つの曲の中に、三つか四つの構成を設け、一つ一つの構成がさらに三つか四つの構成的な意味を持つようにしたいという考えも湧き上がっていた。一つの曲は必ずフラクタル構造を持つという思いがあり、そうしたフラクタルをいかに表現していくかが大切に思われた。

作曲ソフトが決まり、これから本格的に作曲に必要な言葉と文法を学んでいく必要があると思い、それらを体系的に学べる一冊の専門書を明日購入することに決めた。

「優れた器楽なら、その特定の表現は概念に還元できる。そのため、それを明確な言葉で言い表すことは可能である」という言葉を残したベルギーの作曲家アンドレ・グレトリーの考えには共鳴するものがある。そもそも、今回作曲実践を始めることにしたのは、自分の内側にある現象がもはや自然言語で表現しきれないほどに膨れ上がり、それらを音楽言語で表現したいという思いが湧き上がったからである。

また、そうした表現を通じてさらに深く自分の内面領域を捉えていくということだった。そうした課題を突破する鍵は、自分が表現したい現象を音楽言語の形に変え、そこから自然言語の形に戻しながら捉え直すことにある、という閃きが得られた。その実現に向けて、まずは作曲に必要な言葉と文法を少しずつ学習していきたい。そのようなことを考えていると、夢の中で撃退されていった小さな怪物たちは、私の内側にある無数の小さな自己なのではないか、という気づきが得られた。

これは「そうなのではないか」という疑問ではなく、「そうなのだ」という確信に近い。昨夜の夢の中で撃退されるとともに音を奏でていたのは、私の内側に存在する無数の小さな自己である。そうであるならば、作曲というのは私にとって、内側の現象を外側に形として表現するというよりも、内側の小さ

な自己を死滅させる試みであり、そこから新しい自己を生み出していくことに他ならない。それは、自己の自己に対する闘争と克己そのものだ。2017/4/29

1007. 認識と行動を変える哲学

今朝はまず最初に、ジル・ドゥルーズの“Difference and Repetition (1968)”を一章ほど読み進めた。残すところあと三章となった。本書は英訳においても難解な箇所が多々あるのだが、日本語訳はどのような文章になっているのか気になるところである。翻訳というのは、やはり非常に難しい作業だ。

私はできるだけ翻訳書を読まないようにしているが、原著がドイツ語やフランス語の場合、どうしても英訳に頼らざるをえない。翻訳書は、ほぼ全ての場合において、著者がその書籍に込めた実存性を削ぎ落としていまい、代わりに翻訳書の実存性がその中に混入することになる。また、翻訳書からは、著者が執筆という作業を通じて内側のものを外側に形とした際に書籍に込めたエネルギーも削ぎ落とされてしまっているように思う。

しかし、翻訳書に関して面白い点は、時に原著よりも内容が明瞭である場合があるということだ。もしかすると、それは原著の次元を落とすことによる副産物かもしれないが、時に原著以上に翻訳書の内容が明確である場合もありうる。そのようなことを思いながら、本書を読み進めていた。

ある箇所に行き着いた時、私は文章を追いかける目をそこで止めた。最近頻繁に考えていたことを、これまでの私の認識世界にはないような言葉で言い換えてくれるような文章に出会ったのだ。私たちは時に、ある対象について考えることを余儀なくさせられることが多々ある。これは考えるということのみならず、内側のものを外側に形として表現する場合でも同じである。

つまり、この世界の何かが私たちに表現を余儀なくさせることがあるのだ。この何かについて、以前から私は強い関心を寄せていた。こうした関心もまた、何かが私にそうさせるのだ。それが気になるという状態が長く続いていた。

ソクラテスは、私たちがある対象について考えることを否応なしに強制するような働き、あるいは内側のものを外側に表現せざるをえないような現象を生み出す働きを「魔神との出会い」とみなした。結局それは、何らかの認識対象が私たちにそうした働きかけをしているのではなく、認識対象が生

まれる以前の、より根本的な何かとの出会いがそうさせるのだ。このような趣旨の文章に行き着いた時、私の中でまた少し何かが動いたような気がした。もちろん、根本的なその「何か」が一体どのようなものなのかということに対する疑問は残り続けているが、その疑問に新たな光が差し込んだのは間違いなかった。それをもたらしたのは、これまでの私にない新たな言葉だった。新たな言葉や概念は、私たちの認識を変えていく力を持っている。

認識を変え、何かに迫っていくためには、やはり新たな言葉や概念が不可欠なのだと改めて知る。そして、対象の本質に迫っていく過程で、自分の認識のみならず、自分の行動までもが変化するという現象は注目に値する。

内面と外面、つまり認識と行動は相互的な作用を与え合っている。対象の深みに向かっていくためには、認識と行動の双方を変容させていくことが不可欠だが、認識を変えるためには行動を変える必要があり、行動を変えるためには認識を変える必要がある。ここ最近哲学に触れながら思うのは、それは認識と行動の双方を変える力があるということだ。2017/4/29

1008. 逆周りから得られた気づき

今日のような日を春と呼ばずになんと呼ぶのだろうか。フローニンゲンもようやく春に入ったようだ。確かに、朝晩はまだ暖房をつけている。しかし、今日はとても暖かい日曜日だ。

午前中の仕事を済ませ、私はランニングに出かけた。今日は自宅を出発する前に、なぜだかいつも走るコースを逆周りに走ってみようと思った。

書斎の窓から目の前の通りを眺めてみると、街路樹の間に立てかけられている広告が以前のものと変わっており、モーツァルトの『レクイエム』のコンサートの宣伝がされていた。この広告は週替わりぐらいで変化することに以前から気付いていた。明確なつながりを見出すことはできないのだが、『レクイエム』のコンサートの表示板を見て、今日はいつもと逆周りにランニングしようと思い立った。

いつものコースを逆周りに走り始めると、頭の中の感覚がいつもと異なることに気づいた。これは微細な差異だが、見逃しようのないものだった。また身体的にも、いつものコースを走るときは重心が

右に少しばかり傾いているのに対して、逆周りに走っている今日の感覚は重心が左に寄っていることを捉えていた。

走っている最中にまず考えていたのは、午前中の仕事についてであった。午前中はドゥルーズの哲学書を読み、そこから非線形ダイナミクスの専門書に取り掛かっていた。前者の書籍は、発達現象に潜む差異に関する理解を深めるための洞察をもたらしてくれるものであり、後者の書籍は、発達現象のプロセスやメカニズムを解明する手法に関する理解を深める役割を果たす。両者は哲学と応用数学というように、分野が異なるのだが、どちらも私の専門である人間発達と密接に関係している。

ドゥルーズの難解な哲学書から非線形ダイナミクスの専門書に移った時、不思議な感覚があった。いつも以上に数学概念が明瞭なものとして知覚されたのだ。言い換えるとそれは、応用数学の概念が薄いイメージとともに内側に入り込んでくる感覚であった。こうした感覚をもたらした要因が、果たして哲学書を読んだことにあるのか、あるいはドゥルーズの哲学書という個別の書籍を読んだことにあるのかは定かではないが、良質な哲学書には概念に対する感覚を鋭敏にする作用があるような気がしている。

ここから実験的に、これから毎日最初に読む書籍を哲学書とし、次に非線形ダイナミクスの書籍に取り掛かるという流れを作りたい。そのあとに、発達心理学やその他の関心事項に関する書籍を読むように心がけたいと思う。

今日はドゥルーズからカントに移行しなくて正解であった。読書にも大きな変動性を持たせ、哲学書を起点とし、そこから異なる分野の書籍に大きく移るという振り幅が大切だ。そのようなことをランニングの途中で考えていると、ある場所に差し掛かった時、私は思わず後ろを振り返った。何のためかというと、ある四階建ぐらいのマンションの壁の真ん中に大きな絵画が描かれており、それを見るためである。

今日はいつもと逆周りに走っているため、その絵を見るためには振り返る必要があったのだ。この絵はとても不思議な内容を持っている。その内容は、宇宙空間の中に三枚の板が描かれており、それぞれの板から惑星が飛び出しているような姿を捉えているというものだ。いつもは大抵足を止

めることなく走りながらこの絵を眺めているため、細部は不明なのだが、いつもこの絵に見入ってしまう自分がいる。それは、今の私が思っている以上に深い意味を持つ絵なのだと思う。次回のランニングの際は、少し立ち止まってこの絵を鑑賞したい。

ランニングから自宅に戻ってくると、最後に考えを巡らせていたのは、思念や感覚の持続時間についてである。上記の事柄は全てランニング中に考えていたことであり、感じていたことであった。それらがランニングから戻ってきて一時間後にもまだ消えずに自分の内側に残っていた、ということに注目していた。それに対して、日々の生活の中でよくあるのは、これは重要に違いないという閃きが数分後にはどこかに消え去っているという現象だ。

その閃きは、明らかに自分にとって重要なものであるはずなのに、なぜだかそれがすぐに消え去ってしまうことがある。そこから思ったのは、単純に内側に生じる現象が自分にとって重要か否かがその持続時間に影響を与えるわけではないということだった。何か他に決定要因があるようなのだ。

上記で書き留めていた事柄は、極めて些細なことだと思うが、そうした思念や感覚が自分の内側に長く留まっていたということは、とても興味深いことだった。そしておそらく、それらの一見些細に思えることの方が自分にとって重要なことなのであり、それらの内側に長く留まるものを外側に形として残していくことが大切なのだと思った。2017/4/29

1009. さらなる下積み期間を求めて

食卓の窓から見える景色が随分と春らしくなった。それを象徴するのは、今目の前の広場に咲き誇っているタンポポだ。真夏の太陽よりも鮮明な黄色を発するタンポポがついに姿を見せてくれた。食卓の窓から見える広場は、小さなタンポポ畑になっている。

そのタンポポ畑の中を乳母車を引いた二人の両親の姿が見えた。その乳母車には女の子が乗っているようだった。タンポポ畑をゆっくりと歩いていくその家族を見ていると、それを見ているこちらも幸福な気持ちになった。私は、咲き誇るタンポポの姿とその家族の幸せそうな姿の相乗効果が相まって、二重の意味で幸福感を得ていたのである。そのような幸福感に浸りながら、私は昼食を食べていた。ランニング後の昼食の美味しさは群を抜いている。

同時に私は、食べるために仕事をするのではなく、仕事をするために食べるのだという認識を改めて持った。食べるために日々文章を書いたり読んだりしているのではない。文章を書くため・読むために食べているのだ、という発想を再度強く持った。これは幾分発想の転換と呼べるものかもしれない。

発想を転換するためには、何よりも転換されるべき観点がまずもって不可欠であり、さらには、発想の転換を促す観点が不可欠だ。単純な観点主義に陥ることを避けなければならないが、観点を獲得し続けていくことは非常に大事だと思う。物を考えるためにも、何かを実践する際にも観点が必要なのだ。そして、既存の考えや実践を乗り越え、それらを深めていくためには新たな観点が不可欠なのである。

以前の日記で書き留めていたように、現代社会において、観点の不足は深刻な問題の一つなのではないかと思う。身も蓋もない言い方をしてしまうと、それは「不勉強」という言葉に集約されるかもしれない。私も日々、自分の不勉強と格闘し続けるような毎日を送っている。自分の無知さが露呈しなかった日は、これまでの人生の中で一日たりとも存在しない。昨日もそうであったし、今日もそうだ。そして、明日もそうだろう。

自分の内側の現象を今よりもより正確に表現するための観点が私には必要であり、自分を知り他者を知るという人間理解においても、その認識を絶えず深めるための新たな観点が常に必要なのだ。現代社会に蔓延する不勉強さと無知さへの批判の思いが強ければ強いほど、それは自分への批判を強めることになる。

絶えず自己を乗り越えていくためには、こうした自己批判は不可欠なものであり、それを抱えながら日々の探究に打ち込みたいと思う。この問題に付随して、午前中に読んでいたジル・ドゥルーズの書籍“Difference and Repetition (1968)”の冒頭には興味深いことが書かれている。

それは、「私はこの書籍を通じて初めて自分の哲学をした」という意味の言葉である。この言葉は私にとって大変印象的だった。私は、ドゥルーズがこの哲学書を生み出すまでの長い下積み期間について思いを巡らせていた。このような哲学体系を打ち立てるためには、絶えず新たな観点を獲得

し、それらを絶えず磨き、観点を絶えず組み合わせながら一つの体系に向かっていくという長大な下積み期間があったのだと思う。

これはドゥルーズのみならず、自分固有の一つの体系をこの世界に表した全ての人物に当てはまることだろう。ベートーヴェンの音楽体系しかり、私が尊敬する発達科学者のカート・フィッシャーやポール・ヴァン・ギアートもそうだ。彼らは一様に長い下積み期間を経て、自分の体系をこの世界に表したのだ。今の私にはまだまだ長い下積み期間が必要である。そして、この下積み期間をどれだけの密度で過ごすかが何よりも重要なのだ。蟻地獄のような抜け出せないほどの深い下積み期間が欲しい。2017/4/29

1010.「実践書」について

午後からの仕事に取り掛かる前に、先ほど英国のアマゾンを通じて、四冊ほど作曲に関する書籍を購入した。厳密には、音楽理論に関する書籍が一冊ほど混じっているが、すべての書籍に共通するのはそれらが実践書であるということだ。音楽理論に関するその書籍にも、音楽理論を体感として学べるようなエクササイズが盛り込まれている。また、作曲方法に関する三冊も、エクササイズが多数盛り込まれている。さらに、そのうちの二冊は小・中学生が初めて作曲を学ぶためのテキストとして用いられるものだ。今回、私はあえてそうした書籍を購入した。

その背景には、私が作曲について学びたいわけではなく、作曲したいという強い思いがあるだろう。予想以上に書籍を吟味する時間がかかってしまったのも、作曲に関して不必要に細かい事柄が書かれていたり、作曲という行為を学術的に論じるような書籍を振るい落としていく必要があったからである。

興味深いのは、いつも私が専門書を選ぶときは真逆の基準を採用していたことである。細かな点も含めて、いかに学術的に論じられた書籍なのかが、専門書の購入の際にいつも大きな基準となっている。今回の書籍の購入に際してそうした基準を採用しなかったのも、本当に自分が曲を生み出すというただ一点だけに焦点を向けているからだろう。作曲に関して様々な音楽知識が必要であり、それが作曲をさらに深いものにしていくことは十分に理解している。それは自分の研究領域や実務領域においても等しく当てはまる。

しかし、今回は、とにかく自分の内側にある思念や感覚を的確に表現するような音楽をいかに生み出していくかが最大の焦点だった。それには、理論に先立つぐらいの実践が必要であった。今回購入した四冊の書籍はどれも、理論的な解説の直後にエクササイズが多数盛り込まれている。

その他にも様々な書籍を吟味していたのだが、それら以外のものは、「古典作曲家と商業作曲家の違いとは？」「作曲家として活動するためには？」「作曲の歴史」など、私の焦点をぼやかすような内容が必ずどこかに盛り込まれていた。ページの最初から最後まで自分の焦点をぼやかさない書籍が、今回購入した四冊だ。

これは私がプログラミング言語のRを学んだ際にも、そして、非線形ダイナミクスやダイナミックシステムアプローチの研究手法を学んだ際にも痛感したのだが、手を動かしながら学ぶことは非常に大切である。私はあまり「実践的」という言葉や「実践書」という言葉が好きではないのだが、体験を通じて学んでいくことは学習をより深いものとするのは間違いない。私がそれらの言葉を好まないのは、世間一般の風潮として、実践を過度に重視し、理論を軽視するようなことが頻繁に見られるからである。

学習で最も重要なのは、実践即理論であり、理論即実践という考え方なのではないだろうか。購入した書籍を読み進める時は、エクササイズを一つも飛ばすことなく、「実践即理論・理論即実践」の精神を持ち続けたいと思う。

昨日ダウンロードした作曲専用ソフトを活用しながらそれらのエクササイズを行い、実際に手を動かしながら、エクササイズを通じて生み出された音を自分の耳で聴くということを心がけたいと思う。

上記の事柄は、六月の初旬に刊行される第二弾の書籍にも関係する話だとふと思った。第二弾の書籍は、単純にこれまでに紹介されていない発達理論の枠組みを提示するだけではなく、各章の合間合間に合計で18個ほどのエクササイズを設けている。そうしたエクササイズを設けたのは、理論と実践を共に重視する「実践即理論・理論即実践」の精神が、ここ最近の私の中で強くなっていたからなのかもしれない。新たな概念や理論を学ぶことは、私たちの認識と行動を必ず変えるはずなのだが、それをより促進するためには、新たな概念や理論を通じたエクササイズを行うことが重要だという考え方が、特に今回の書籍の中で色濃く出ていたように思う。

Rにせよ、非線形ダイナミクスやダイナミックシステムアプローチの研究手法にせよ、作曲にせよ、そして英語やオランダ語にせよ、それらは全て私自身が実際の体験を通じて学んできたものであるということを、自分で執筆した書籍から逆に学ばせてもらったように思う。とりわけ発達科学の知見は、成長・発達支援という実務と直結するべきものであるがゆえに、近い将来第三弾の書籍を執筆する際にも、ぜひとも「実践即理論・理論即実践」の精神が具現化した内容にしたい。2017/4/29

1011. 小さな作品をじっくりと数多く

何事も小さなことから始め、それを継続させていくことがいかに大切かを知る。今日は昼食後から、修士論文の手直しを行った。“Discussion”のセクションにおいて、教師と学習者の発話行動上の発見事項と発話構造上の発見事項を統合させる箇所を執筆し終えた。今日は気付かない間に、日本語の日記を10,000字ほど書き残していたのに対し、同じ時間をかけて英語の論文で執筆できたのは400字ほどであった。

どちらも共に内側にあるものを形として表現したことに変わりはないが、前者はより流動的な生成であり、後者はより建築的な生成であったように思う。日記を書き残す時には、流れるように自分の言葉を外に出していくことに充実感を覚えるが、論文執筆の際には、一つ一つの言葉を厳密に選び、それらを緻密に建築していく際に固有の充実感を覚える。この二つの充実感は、今の私の日々の生活に欠かすことのできないものである。今回の論文執筆を通じて改めて考えさせられたのは、小さなことから着手し、それを積み重ねていくことの価値と尊さであった。

今回の修士論文は、字数にして10,000字、ページ数にして40ページを上限とする小さなものだ。しかし、大きな作品をいきなり生み出そうとするのではなく、小さな作品から手掛けていくこと以上の王道はないだろう。

今回の論文執筆を通じて、自分を惹きつけてやまないテーマに対して小さな研究を行い、それを簡潔にまとめた論文を継続的に執筆していくことを行いたいと気持ちを新たにした。こうした創作過程は、論文執筆のみならず、芸術作品の創作でも同じなのだと思う。

実は嬉しい知らせとして、来週の火曜日から二日間にわたってフローニンゲンで行われる、ダイナミックシステムアプローチに関するワークショップに私が敬愛するポール・ヴァン・ギアート教授が参加

するそうなのだ。ヴァン・ギアート教授は、カート・フィッシャーの良き共同研究者であり、二人は数多くの優れた共同論文を残している。以前紹介したように、私はフィッシャー先生からヴァン・ギアート教授を紹介してもらい、ヴァン・ギアート教授に今の論文アドバイザーであるサスキア・クネン教授を紹介してもらった。

ヴァン・ギアート教授の仕事に最初に出会ったのは、私がニューヨークに在住していた頃なので、今から四年前のことになる。それ以降、ヴァン・ギアート教授が執筆した論文と書籍をほぼ全て読んできたように思う。

残念ながら、私がフローニンゲン大学にやってくる二年前に、ヴァン・ギアート教授は公式的に大学から引退をしていた。しかし、今回のワークショップに顔を出していただけるというのは私にとって大変嬉しい知らせであった。実際のところ、私はヴァン・ギアート教授の学術的な功績のみならず、彼がプロ並みの画家であることに対しても尊敬の念を抱いている。ヴァン・ギアート教授はフィッシャー先生と同様に、研究者としての生涯において300本を超える論文を執筆してきた。

絶え間ない論文執筆と並行して絵画を描き続け、絵画に関しても卓越した作品を残していることは、学術研究と並行して作曲活動を始めた今の私にとって大変励みになる。火曜日と水曜日にわたってヴァン・ギアート教授と交流することを通じて、学術研究と作曲に関してまた何らかの刺激を得ることになるだろう。二つの探究領域において、小さな作品を数多くじっくりと作っていきたいと気持ちを新たにした。2017/4/29

1012. 成人発達とキャリアディベロップメント、そして夢のシンボル

昨夜は、就寝前の一時間を休息に当てることなく仕事を続けていた。「成人発達とキャリアディベロップメント」のコースで課せられている共同研究に関する下調べを、データベースを活用しながらあれこれと行っていた。他の三人のメンバーと先週に一度ミーティングを行い、論文のテーマの候補を三つほど挙げていた。来週の火曜日までに行う必要があるのは、各自がさらにテーマを掘り下げ、より具体的なテーマの候補をいくつか考えることと、先行研究の調査である。

取り上げる論文は、仕事に伴う発達現象であれば何でもよく、三つのテーマ候補との関係で言えば、今のところ私の中で関心があるのは、転職に伴うアイデンティティの変化と能力の変化、70歳以上

の能力の性質とその発達、という二つに絞られる。今回の共同研究では各人が必ず外部の人間にインタビューをすることが課せられている。来週あたりからインタビューの質問項目をメンバーとともに考えていく必要がある。

一つ目の関心テーマで言えば、転職がアイデンティティと能力の変化にもたらす肯定的・否定的両側面をインタビューで調査し、否定的な側面に対して実証研究に基づいた支援策を立案していきたい。二つ目の関心テーマについては、加齢によって能力が落ちると一般的に考えられがちであるが、どのような能力に衰退が見られ、どのような能力は逆に発達していくのかを先行研究で調査し、インタビューを通じて70歳以上の人たちが特に力を発揮できる仕事内容はどういったものなのかを明らかにしていきたい。

そうした調査を通じて、特に70歳以上の人間を雇用する組織に対する提言をしていくような形をとることになりそうだ。能力の種類と発達段階に応じて最適な仕事というものがあるだろうし、それを見誤ってしまうと私たちは本来の力を発揮できない。特に70歳以上の人たちの能力に関して、彼らのどういった種類の能力が優れており、それらを活かす仕事はどのような種類のものなのかという点は、高齢化の進む現代社会においてそれほど明確になっていない気がするのだ。

加齢と能力の発達に関してよく引き合いに出されるのは、流動的知性（fluid intelligence）と結晶的知性（crystallized intelligence）という二種類のものだが、こうした領域全般的な知性のみならず、領域固有的な知性も論文の中で取り上げていきたいと思う。本日の昼食前に再度テーマの見直しと先行研究の調査を行いたい。

この共同研究の下調べに着手することに時間を充てる形で昨日は就寝を迎えた。昨夜の夢は鮮明に覚えていないだが、断片的に夢のシンボルを想起することができる。

日本語を話せないオランダ人の友人が、意味が通じない日本語が含まれたメッセージをチャットで私に何通か送ってきたという場面や、日本人の友人がオーストリアのとある大学に留学しており、70ページほどの修士論文をドイツ語でちょうど書き終えたという知らせを受け、それを私が簡単にレビューするという場面を覚えている。

また、オーストリアのとある町に滞在中、町の一角にある様々な露店が集まった場所に、偶然友人の母親が働いているのを見かけた。こちらから話しかけた方がいいのか躊躇しながら、その母親が働く露店の前を私は行ったり来たりしていた。向こうはこちらのことを覚えていないかもしれないという思いから、結局挨拶をしないまま私はその露店街から立ち去った。その後、挨拶ぐらいはしておいた方が良かったのではないか、という後悔と自責の念の双方を少しばかり引きずっていた。

ウィーンでフロイト博物館を訪れた時、フロイトは自分の夢を1000以上の数にわたって分析していたことを知った。分析とまではいかずとも、私も夢の中に現れるシンボルぐらいは記録しておきたいと思う。夢の中に現れるシンボルは、その夢を見て随分時間が経った後にハッとさせられるような意味に気づかせてくれることがある。また、夢のシンボルにはそもそも治癒的かつ変容的な作用が内包されており、その包みを開けるような意図を込めて、夢のシンボルに関しても今後も観察と記録を続けたい。2017/4/30

1013. 階層的かつネットワーク的な生命としての知識体系

いつも何かのきっかけで突如として新たな考えを思いつくことがある。先ほども早朝の仕事を済ませ、ソファに腰掛けながら朝食のリンゴをかじった瞬間に、知識体系について新たな発想が生まれた。これまでは、知識の体系は土台から頂点に向かってピラミッド状に構築されていくというイメージを持っていた。高度な段階の知識階層を生み出すためには、その下位階層があり、それに対しても下位階層がある。そのような階層が頂点から底辺に向かって裾野を広げていくようなイメージが私にはあった。

しかし、先ほどリンゴを一口かじった瞬間に、知識体系を単純に階層的に捉えるようなイメージではなく、階層的かつネットワーク的に捉えるイメージが突然湧き上がった。そのイメージの感覚を辿っていると、真っ先に知識体系が網の目状を成しているという体感があった。その網の目を構成するあるクラスターに私の焦点が向かった。

そのクラスターを真上から眺めると、それは複数の点がネットワーク状になっている姿しか見えないが、それを横から眺めるとやはり階層的になっていることがわかった。そして、階層構造を持つ一つ

一つの体系が他の体系と結びつくことによって、さらに大きなネットワークを構成していることがわかったのである。これらは全て実証的なものではなく、体感としての気づきに留まる。

第二弾の書籍の中で取り上げたカート・フィッシャーのダイナミックスキル理論のレベル尺度を用いながら、自分の内側の知識体系という一つの大きなネットワークにおいて、どのクラスターのどのノードがどれほどのレベルにあるのかを内省していた。あるクラスターの全体はレベル12にあるように思えても、意外とそれを構成する下位階層のレベルが脆弱であったりする。一方、あるクラスターの全体はレベル11なのだが、下位階層を含めて全体が非常に堅牢な作りになっているものを発見することができた。

そして、それらのクラスターが常に鼓動を続けている様子を見た際には、少しばかり驚きの念を持った。知識体系がまさに一つの生命のように絶えず運動を続けているのだ。幾分奇妙なイメージとして、一つのクラスターを構成する下位階層に新たな知識が付着していく様子や、それが付着せずに無の世界に消え去ってしまう様子、さらには既存の知識がクラスターから剝がれ落ちしていく様子を見てとることができた。

一つのクラスターが既存の知識と新たな知識を引きずりながら進んでいる様子や、両者の知識が調和をなしながら軽快に生命運動を続けているイメージが、ありありと私の脳裏に浮かんできた。そこから最後に、第二弾の書籍では言及することのなかった、レベル13や14の知識階層の構築を模索するような動きを自分の知識体系が行っていることに気づいた。

システムとしての知識を複数束ね、メタシステムとしての知識を構築し、原理的なレベルにまで知識階層を高めるだけではなく、原理同士をつなぎ合わせようなレベル13（原理配置段階）の知識階層の構築へ向けた運動や、二つの原理がつなぎ合わされた一本の線と同様の質を持つ線をさらに複数生み出し、それらの線を面として構築するようなレベル14（原理システム段階）への道を模索するような動きを観察することができたのである。

しかし、原理としてのシステムを複数生み出し、それらをさらに高次元の領域で束ねるようなレベル15（原理メタシステム段階）への運動は、私の内側では一切見られなかった。しかし、上記のような運動を行っているが、今の私の知識体系の姿だということがわかった。

今、書斎の窓から見える様々な動植物の姿を確認した。そうした観察と同様に、自分の内側の知識体系という生命の観察も絶えず行っていきたいと思う。2017/4/30

1014. 拡散的な思考と留まることについて

今日は少しばかり風が強いが、天気に恵まれた日曜日だ。書斎の窓からつぼみの付いた木々が風に揺られている。

先ほど早朝に取り掛かっていた、ジル・ドゥルーズの“Difference and Repetition (1968)”の一章を読み終えた。残すところあと二章となり、明後日に本書の再読が終わるだろう。午前中に読み進めていた章も、非常に面白い指摘がなされている箇所が随所にあり、普段は青いボールペンで書き込みをしながら書籍を読む習慣があるのだが、特に関心を引く箇所には思わず色を変えて赤いボールペンで書き込みをしていた。

それらの箇所が私に面白いという感情を引き起こしたのは間違いないが、それらの箇所が真に意味することを自分なりに掴むには随分と時間がかかるだろう。それぐらいにドゥルーズは、このリアリティに潜む無数の真理のいくつかを、私がこれまで見たことのないような観点で深くえぐり出している。

当初は一時間ほどの時間を使って本章を読み進めるつもりだったが、結局、二時間弱の時間を充てて本書に取り組んでいた。明日も明後日も、予定よりも多くの時間がかかることを見込んでおいたほうがよさそうだ。

本書を読みながら、改めて自分の思考特性に気づかされた。私の思考はつくづく拡散的なのだ。つまり、私は長く一つのことを考えることができない。思考が次々に飛び火し、とりとめもない考えを絶えず辿っていくような思考の型を持っている。ただし、ある特定のテーマについて時間を空けながら継続的に考えることなら辛うじてできるようなのだ。そうした拡散的な思考特性を持つがゆえに、日記を執筆する際も、原稿用紙3〜4枚ほどの分量にその内容が毎回落ち着き、落ち着きを見せたかと思うと次の考えに思考が向かっていく。

3〜4枚ほどの分量を書き終えると、全く論点の異なる考えが浮かび上がり、それが外側に形となって表出したがるうずきが強ければ、私は再び3〜4枚ほどの日記を書き留めることに向かわせられる。こうしたプロセスがひと段落したところで、ようやく他の作業に取り掛かることができる。

また、原稿用紙3〜4枚ほどの分量に関して、時にそれよりも長いことや短いことがあるが、平均してそれらの分量に落ち着くのは、私が対象に長く留まっておくことができないことを示唆している。しかし、短いながらもそうした文章を書くことによって、なんとかその対象に留まりながらそれと向かい合うことができている、と見ることもできる。

随分と昔の日記の中で、「書くことは留まることである」と書き残していたのは、まさにそういうことだったのかと今になって気づく。対象から対象へ移るという流動性が自分の思考特性であるならば、対象の中に留まるという固定性が等しく重要になる。そうした固定性をもたらしてくれのが、私にとってはやはり文章を書くということなのだ。動きながら留まり、留まりながら動いていくというのは、生物の何かしらん特徴に喩えられそうだ。2017/4/30

1015. 諦めと円転運動

ベートーヴェンピアノソナタ第14番『月光』のある箇所で、自分の意識がそこにピタリと留まった。第1楽章から第2楽章に移る際の無音の瞬間に、そこに意識が凝縮されていった。私は、第1楽章から第2楽章への移行の姿に大きな感銘を受けた。「そこからそこへ展開させることがそのように可能なのだ」ということに対する大きな驚きを持ったのだ。

作曲の学習と実践を少しずつ始めてから、曲との向き合い方が随分と変わったように思う。作曲者の観点から、曲の展開のさせ方やそこに込められた意味などを探究するような姿勢で曲を聴くようになっている。ベートーヴェンの曲を聴けば聴くほどに、自分には作曲は到底無理だという気持ちが強く湧き上がるから嬉しく思う。自分にはできないという気持ちがその活動に私を強く向かわせるのだ。

科学者として発達現象を研究してくことは自分には無理だと思わせてくれたのが、カート・フィッシャーやポール・ヴァン・ギアートが残した一連の仕事だった。異様な諦めの気持ちが私を発達研究に駆り立てた。そして、今も駆り立てられ続けながら毎日の仕事と向き合っている。自分にとって真に重

要なものは、いつも途轍もなく高い壁を私の眼前に突き立ててくれるものであることに改めて思いを馳せていた。

その壁が見える道こそ、自分が歩む道なのだと常に思って毎日を生きている。研究も作曲も自分には無理だとわかっているからこそ、そこに向かっていくのであり、その対象から手招きされるのだ。そのようなことを思う。

これはどこか幼少期の頃に感じていた感覚に似ている。何かに手招きされ、手招きの方向に向かって歩き続けるというのは、幼少期も今も変わりがない。それは人生が一回転したかのような錯覚を私に引き起こす。だが、手招きするものに気付き、そこへ向っていく自分を知っているがゆえに、今の私は以前と全く同じ自分ではない。それを考えると、螺旋を描いたことがわかる。しかし、それでもこれは円転運動だ。

今日この瞬間にこのような円転運動に気づいたのは、昨日の円周率に関する関心と密接なつながりがあるだろう。円を描くという現象、円の持つ性質、それらは今の私にとって深い意味を突きつけてくる。読みに読み、書きに書くというのも、一瞬の円転運動なのかもしれない。

この円転運動の先に何かを見出すことができるのだろうか。実はそれは大きな問題ではない。何を見出せたかが重要なのではなく、何かを見出そうと生き続けることに価値があるように思うからだ。
2017/4/30

1016. 夢の中での投影について

昨夜も夢を見たのだが、それについて書き留める前に、夢の持続時間について気になったことがある。私が夢を見ている時間というのは非常に短い。これは他の人にも当てはまることなのだろうか。あるいは、夢を見ている時間が短いというよりも、実は夢は長い時間現れているのだが、それらを覚えていないだけなのだろうか。

いずれにせよ、いつも自分が記憶に留めておける夢というのは、時間として短く、それも目覚める直前に現れることが多い。昨夜の夢も起床直前に見たものだった。

夢の中で私は、学校の教室にいた。教室の右側の一番後ろの席に座り、哲学の授業を受けていた。黒板に書かれた三行ほどの文章に対して、教師から生徒に質問が投げかけられ、ディスカッションが始まった。ディスカッションの途中で、私の列の最前列に座る友人から教師にとても鋭い質問が投げかけられた。その質問に対し、教師の表情はこわばり、即座に回答できないようであった。

非常に鋭いその質問に対して回答できないことを知った教師は、その質問を生徒全員に質問するという行動に出た。私は、友人が最初にその質問を投げかけた時から、それは実に面白い質問だと思っており、同時に、それに対する自分なりの考えがあったため、挙手をすることなく、右列の最後尾から私は自分の意見を述べ始めた。

問いが難解なものであったため、自分の思考が混沌に陥ることを避けながら、それでいて一気呵成に質問に対する回答を述べた。自分の中では分かりやすいように説明したつもりだったのだが、私の説明を教師も含め、ほとんどの生徒が理解できていないことを教室内の雰囲気から感じ取った。

短い沈黙の後、自分の説明が冗長だったのかもしれないという考えが一瞬脳裏をよぎったが、その質問をした友人だけが笑顔と共に納得の表情を浮かべていた。その姿を見て私は安心し、私も笑顔になった。

そのような夢を昨夜見た。改めてこの夢を振り返ってみると、夢の中の自分は覚醒状態の自分と似たような性質を持っていることに気づく。あるいは、夢の中の自分も間違いなく私であり、それが無意識の領域で現れる自分であるがゆえに、覚醒状態の自分よりもさらに本質的な自己を表していると述べていいのかもしれない。

いずれにせよ、最も大きな共通点は、回答に窮するような質問であればあるほど、それを面白いと思う自分の思考特性だった。正直なところ、夢の中の私は、そうした問いに対して表情をこわばらせた教師の気持ちを理解することができなかったのを覚えている。

おそらく教師の気持ちの中に、生徒の質問に全て答えなければならないという旧態依然とした教師像のようなものがあったのだろう。同時に、教室内の他の生徒に関しても、教師とはすべての質問に答えてくれる人間である、という幻想を根強く持っているような気がした。

© YOHEI KATO 2018

それに対して、私が座っていた列の最前列にいた友人だけが、そうした幻想を教師に対して抱いていないことが直感的にわかった。夢の中に現れる人間が持つ無意識的な側面をどのように解釈したら良いのかわからないのだが、夢の中にいた教師と多くの生徒が持っていた旧態依然とした発想を、もしかしたら夢の中の自分も含め、顕在意識の自分も少なからず同様のものを持っているかのように思われた。

つまり、顕在意識の私は、そうした旧態依然とした発想を嫌悪する傾向にあり、それが私のシャドーを形成し、そのシャドーを夢の中の教師や多くの生徒の中に投影していたのだ、という構図が見て取れる。夢の中の教室では、教師も生徒も日本人であったため、なおさらそうした旧態依然とした発想が色濃く浮かび上がっていた。そうした発想を斬り捨てるかのように、私は友人の質問に対して、挙手することもなく一気呵成に自分の見解を述べ始めたようにも思える。教師と生徒の関係性に対する私のシャドー以外にも、その他のシャドーもこの夢の中に現れていることに気づいたが、それらをここで書くことはできない。

最後に、友人が投げかけた問いの内容を思い出せないことは少し残念だ。夢の中の私が非常に面白いと思っていたため、それはきっと顕在意識の私にとっても面白い問いだと思うのだ。何か循環的な側面を持つ問いであり、その循環の中にいては決して回答することができないのだが、その循環から離れ、一つ上の視点からその循環構造を眺めれば一瞬にして回答できるというような問いだったように思う。

この問いに関しても、夢の中の友人が発したものなのだが、夢の中の人間が私の無意識の投影から生まれたものであるならば、やはりその問いは私が発したことになるのだろうか。その点についても関心を持ち続けたいと思う。2017/5/1

1017. 新たな朝の習慣

いよいよ本日から五月に入った。五月を迎えたにもかかわらず、朝夕はまだ暖房をつけて過ごしている。今朝も足元が冷えていたため、暖房をつけた。このところ、これまで以上に、生活の一部として音楽が浸透しているように思える。あるいは、生活としての音楽がそこにあるように思う。書斎にいる時は常に音楽をかけており、生活の中に音楽があり、音楽の中に生活があることを強く感じる。ま

さに、音楽の中に生活の全ての要素が凝縮されており、生活の中に音楽の全てが凝縮されているという感覚である。

オーストリアから戻ってきて以降、アルフレッド・ブレンデル、マウリツィオ・ポリーニ、ヴィルヘルム・ケンプという三人のピアニストが演奏するベートーヴェンのピアノソナタを聴き比べることを継続させていた。三者三様に固有の音楽世界があり、それが演奏にも色濃く現れていることに気づく。私たちが自然言語を用いてメンタルモデルを構築し、固有の意味の解釈と創出を行うように、音楽家は音楽言語を用いてメンタルモデルを構築し、固有の音楽の解釈と創出を行っているようだ。三人のピアニストの演奏を聴き比べることによって、そうしたことが見えてきた。

一昨日読み終えたベートーヴェンのピアノソナタに関する解釈本の中に、ベートーヴェンの曲を演奏する20名ほどの著名なピアニストの名前が挙げられていた。昨日からそれらのピアニストの演奏を一人ずつ聴き比べていくということを行い始めた。中にはベートーヴェンのピアノソナタを全曲録音していない者もいるが、20名全ての演奏を一回聴くだけでも一ヶ月ぐらいの時間を要するだろう。新たな月の始まりに合わせて、気長に聴き比べを進めていきたいと思う。

今朝は早朝の五時に起床し、そこから仕事に着手し始めた。早朝に真っ先に取り掛かっていたのは、ジル・ドゥルーズの“Difference and Repetition (1968)”である。毎日一章ずつ読み進めることによって、いよいよ明日が最終章となった。先ほど一章読み終えた時、ページ数にしてわずか40ページほどに過ぎないにもかかわらず、この書籍を読み進めていくには相当な時間がかかることを改めて思い知らされた。

二読目の今回も、私は一文一文を精読しているわけではないのだが、それでも一ページごとに必ず立ち止まらされる箇所があり、逐一止まって少しばかり考えながら読み進めていくと、かなりの時間になるのである。しかし、これが読書の本当の姿なのだろう。本文の内容は明日で最後となるが、本書に掲載されている注記も読む必要があると強く感じた。そのため、二読目が完全に終了するのは、明後日となるだろう。

それにしても、哲学書に取り組むということから一日の仕事を始めることがこれほどまでに有意義なことだとは知らなかった。この習慣は、オーストリアから戻ってきて以降、何も意識することなしに始

まったものである。だが、この習慣に自覚的になってみると、その後の一日の仕事をより充実したものにしてくれることが明らかになったのである。このように何気なく始まった習慣について思いを馳せていると、ふと、森有正先生も同様の習慣を行っていたことを思い出した。

確か森先生はフランスでの生活のある時期から、毎朝、カルヴァンの『キリスト教綱要』と孔子の『論語』を習慣として読んでいた。そうした思想書を読む習慣をある時から森先生も始めておられたということに、不思議な繋がりを感じた。

人間についての考究を深めたいというシンプルな思いが緩やかに、しかし、確かな足取りで膨れ上がっていく。人間存在を深く理解したいと思う動機が変化し、その動機が深まっていく。

私は哲学者でも思想家でもないのだが、哲学がなければ研究も実務も全くもって仕事にならないことは明確である。哲学書を毎朝読むことから一日の仕事を始めるというのは、今後の私の核をなす習慣になるだろう。そこから自然と、哲学から応用数学へ、応用数学から発達心理学と教育学へという流れができている。これはとても自然な流れだ。

午前中のここからは、非線形ダイナミクスに関する理論書を読み進めたい。2017/5/1

【追記】

早朝に哲学書を読むというのは、一年経った今再び一つの習慣として姿を現した。今はもっぱらプラトン全集を読むことから一日の活動が始まっている。そのあとに何を読むかはその日によるが、現在の関心はルドルフ・シュタイナーの教育思想、特に芸術に関する教育論である。早朝に哲学書を読むという習慣は今後も継続させていきたい。フローニンゲン:2018/5/26(土)17:36

1018. 哲学・数学・心理学・音楽

「逆説的な事柄は、哲学にとっての原動力である」というドゥルーズの言葉が印象に残っている。これは、哲学という思想体系を構築するという営みだけではなく、人間の発達においても等しく当てはまることだと思う。逆説的な事柄は、発達の原動力であることは間違いない。それは単純に、弁証法的な意味でのそれではない。

自分の内側の要素に対して、その性質に反するような要素が外側から内側に混入し、異質なものを統合することによって発達が促されていくというのは単純過ぎる発想に思える。そうした形式的な弁証法過程ではなく、自己の外側から異質なものが入り込むことをせずとも、私たちの自己は絶えず自分の内側に異質なものを生み出し続けているのだ。

つまり、私たちの内側では、常に相反するような現象が自己産出を続けているのである。それらは思念や感覚という形となって私たちに知覚される。それらの逆説的・相反的なものが衝突し合い、その結果として、私たちの内側の現象は深まっていくのだと思う。発達心理学者のハインツ・ワーナーが指摘する、「差異化と統合化は同時に起こる」というのはそういうことだったのだ。

私たちの内側には、絶えず異質なものを生み出す作用があるのと同時に、既存のものとそれらの異質なものを統合させる運動が絶えず起こっているようなのだ。そのようなことに考えを巡らせていた。

早朝にドゥルーズの書籍を一章読んだ後、軽めの朝食を摂った。朝食に関して、これまで無自覚に行っていたことを今日から明確化したいと思う。これまでは六時に起床することが多く、その場合には朝食は果物しか摂らないようにしていた。しかし、それよりも一時間早い五時に起床する場合には、果物だけだと、正午の昼食までにどうしてもお腹が空いてしまう。そのため、五時に起床した場合には、十時半にパンを食べるという規則を設けることにした。

これまでも五時に起床した際には、無自覚的にパンを食べることがあったのだが、今日からはそれを自覚的なものにしたい。ちょうど二枚のパンにココナッツオイルを塗って食べるという行為を五時に起床した場合にのみ実行したい。

パンを食べた後、正午に向けて、“Nonlinear Time Series Analysis (2004)”を三章ほど読み進めた。これは非線形ダイナミクスに関する専門書であり、平易な英語で書かれていながらも、当該分野の知識が依然として不足している私にとっては非常に難解な箇所が多い。本書を読みながら、応用数学が私の探究にもたらす意味について改めて考えていた。

確かに、私はフローニンゲン大学での現在の研究に対して応用数学の手法を活用しているが、私にとっては非線形ダイナミクスやダイナミックシステムアプローチに関する数学的な概念のそれぞれが、人間の発達を理解するための一つの概念装置として機能していることにより大きな意味がある

と思った。これは哲学や音楽を通じて人間を探究する際にも等しく当てはまることだと思う。哲学言語や音楽言語、そして数学言語は私にとって、人間発達に関する自分の言語体系を変容させる役割を果たしてるのだ。

それらは異なる言語体系であるがゆえに、自ずとそれらが開示する意味世界は異なる。あるいは、それらは究極的には同一の意味を開示するのだが、その開示のさせ方が全く異なると言った方が正確かもしれない。結局のところ、経営学だけを通じて経営など全く理解できないのと同様に、心理学だけを通じて人間心理を理解することなど到底不可能なのだ。そうした気づきが、私を哲学、数学、音楽に向かわせたのだとふと思った。2017/5/1

1019. ハーバード大学書店からの贈り物

午前中に二冊の書籍を読み、昼食の前後に仕事関連のメールの返信をした。その後、明日の講義の発表に備えて資料を印刷するために、フローニンゲン大学の図書館に足を運んだ。

五月最初の月曜日は快晴に恵まれた。早朝は気温が低かったが、午後からは気温が上がり、キャンパスに向かう道中のノーダープラントソン公園を歩くのは清々しかった。

明日の講義は早朝に行われ、その前に印刷ができれば理想的だったのだが、図書館の開始時間の都合上、本日中に資料を印刷しておく必要があった。講義があるわけでもないのにキャンパスを訪れるのは少し面倒ではあったが、春の息吹を感じながら散歩できたことは喜ばしいことだった。また、その他にも大学を訪れてよかったことがある。

米国のジョン・エフ・ケネディ大学に留学していた時に、大学の図書館に古書コーナーがあり、1冊あたり1ドルで購入できる仕組みがあった。古書の中から掘り出し物の良書を見つけて購入することは、当時の私の一つの楽しみであった。実は、フローニンゲン大学の図書館にも似た様な仕組みがある。

1冊あたり1ユーロで購入できる場所があり、図書館以外には、社会学研究棟の一階に教授陣が寄付をした書籍があり、それは無料で持ち帰ることができる。今日は図書館に行くついでに社会学研究棟の一階を通った。するとそこに、一冊の興味深い本が置かれていることに気づいた。

書籍全体が古ぼけており、中には多数の書き込みが乱雑な文字でなされ、下線の引き方も幾分乱暴であった。しかし、それらを差し置いて、非常に興味深い中身の本だとすぐにわかった。それは、“Selected Readings on The Learning Process (1961)”というタイトルの書籍だった。まさに、フローニンゲン大学で私が研究しているのは、発達のプロセスであり、学習のプロセスに他ならない。

タイトルを見た瞬間、これは中身を吟味するべき書籍だとすぐにわかった。目次を眺めてみると、各項目にはそれぞれ興味深いタイトルが並んでいた。しばらくその場で立ち読みをしながら、持ち帰るべき書籍なのかをもう少し吟味することにした。この書籍は、学習プロセスを探究する様々な発達心理学者や教育学者の論文が集められたものである。

著者の名前を確認していると、カート・レヴィンとジャン・ピアジェの名前を見つけ、これは持ち帰るべき本だと確信した。レヴィンについては、一昨年東京に滞在していた頃から彼の全集を読み始め、英語で読める書籍は全て手に入れ、彼の理論を理解することに努めていた時期がある。依然としてその仕事は続いており、また折を見てレヴィンの功績を見返そうと思っていた。また、ピアジェに関しても、街の中心部にある古書店でピアジェの“Structuralism (1968)” を見つけて以降、再びピアジェへの関心が高まるばかりであった。

こうしたこともあり、本書は今の自分が所持しておくべき本だと判断した。今から60年近くも前に出版された書籍をこのような形で入手することができた偶然に感謝したい。

書籍の最初のページを開くと、そこには住所と電話番号が明記された「Harvard Book Stores」と記されたシールが貼られていた。きっとこの書籍は、世界のどこかの誰かがハーバード大学書店で購入したものなのだろう。その人も、今の私と同じような気持ちでこの本を手に取ったのだろうか。書籍というのは実に不思議なものであり、それは単なる物ではなく、これ以上ないほどに精神的なものが宿ったものなのだと思う。そうではないだろうか。2017/5/1

1020. 発達理論と音楽で繋がる縁

私は頻繁に、何か意味があるに違いないというような偶然性と必然性を多分に含んだ出来事に遭遇する。今日もそうだった。

一つには、午後に書き留めていた日記の中にあるように、一冊の書籍と出会ったことである。60年前に出版された書籍が現在の自分の目の前に大切なものとして現れた偶然性。名前の知らない誰かが、ボストンのハーバードスクウェアで購入した書籍が、自分の手元に届けられたという偶然に私は驚いていた。

夕方にもう一つ大きな偶然と遭遇した。それは、私が長らく師事していたオットー・ラスキー博士からメールが届いたことである。私が米国で過ごしていた四年間のうち、ちょうど真ん中の二年間は特に、ラスキー博士に大変お世話になっていた。ラスキー博士がこれまで習得してきた発達理論の体系をできる限り学びたいという思いで、ある時期は隔週でラスキー博士と話すほど、集中的に彼の発達理論と発達思想の体系を汲み取ろうとしていた。今でも私の良き師の一人であるラスキー博士からメールが先ほど届いたのだ。

これが大きな偶然だと思ったのは、実は先ほど私は、大学の図書館に行き、明日のクラスで必要な発表資料を印刷するだけではなく、ラスキー博士が書き残した論文をプリントアウトしていたのである。私がプリントアウトしたのは、ラスキー博士が執筆した発達理論に関する論文ではなく、彼が執筆した認知音楽学に関する論文であった。

以前どこかで紹介したことがあるかもしれないが、ラスキー博士は非常に多才な人間である。『啓蒙の弁証法』で有名なテオドール・アドルノとマックス・ホルクハイマーに師事しながら、1960年代にラスキー博士は哲学の博士号を取得している。

アドルノは哲学者としての顔を持つだけではなく、音楽にも造詣が深く、実際に作曲や音楽評論なども手掛けていたことで知られる。ラスキー博士は幼少の頃からピアノを習っており、フランクフルト大学時代にアドルノに師事していた際にも、アドルノから哲学の手ほどきを受けるだけではなく、音楽学（musicology）に関する手ほどきも受けている。

その後、ラスキー博士はアメリカに渡り、カーネギーメロン大学などで人工知能の研究に従事する傍ら、テクノロジーを活用した作曲活動を続け、「認知音楽学」という領域を打ち立てた。ラスキー博士が数多くの領域にわたって活動を行っていたことを列挙すれば切りがないが、数十年前は米国や欧州各地で音楽の演奏会を頻繁に開き、一時期は経営戦略コンサルティングファームの雄であ

るアーサー・D・リトルで経営コンサルタントとして働き、60歳を過ぎてから臨床心理学に関する二つ目の博士号を取得し、現在は発達理論を教えることのみならず、詩と絵画の創作に従事している。

日本では、ラスキー博士の名前はほとんど知られていないだろうし、仮に知られていても発達論者としての顔だけだろう。しかし実際には、発達理論の専門書や論文以上に、ラスキー博士は認知音楽学に関して膨大な量の論文を残している。

これまで私は、音楽について真剣に探究を深めようと思ったことはなく、ラスキー博士が音楽に関して大量の論文を過去に執筆していたことを知りながらも、それらを読むことは一切なかった。だが、私が作曲を始めることを決意した時に、ふとラスキー博士のことが脳裏に浮かび、いくつか興味深い彼の論文を見つけていたのだ。それを本日印刷し、その数時間後にラスキー博士から連絡があった。私は、自分が作曲活動を開始したことと今日の偶然の出来事をラスキー博士に伝えた。

ラスキー博士は、私が作曲を始めたことを驚きの感情と共に喜んでくださり、「音楽に留まり続けること」を勧められた。ラスキー博士との縁は私にとってかけがえのないものであり、それは発達理論と音楽で繋がっているのだと思わずにはいられなかった。2017/5/1

【追記】

上記二つの日記で書かれている偶然の出来事について、今でもその当時の自分の気持ちを鮮明に覚えている。不思議なもので、私はこうした偶然の出来事に出くわすことが人生の中で頻繁にある。自分の目には見えないところで動いている何か。自分の認識の範疇を超えたところにある現象世界が確かに存在するのだという思いが強くなる。上記の日記では、ラスキー博士との縁は発達理論と音楽で繋がっていると述べているが、それはもっと大きな何かに包摂される形で育まれたものだと今なら思う。フローニンゲン：2018/5/26（土）18:03